



金融財政

2007年(平成19年) 11月19日 (月) 第9876号 (購読料金 月額税込み5,565円)

ワークとライフの大前提

お茶の水女子大学教授 篠塚英子



津市と福岡市を講演のため訪れた。テーマは「ワークライフバランス」。政府がかなり力を入れた結果、最近地方でも浸透しつつある。

仕事の合間に、北九州市小倉在住の知人、Kご夫妻の好意で、秋日和の一日、小倉近郊の散策を楽しんだ。寄った旧福岡県遠賀郡八幡村(現北九州市八幡東区)。ここは、明治政府が明治34年(1901年)に建設した「官営製鉄所」東田第1高炉火入れ発祥の地である。そこでフラリと入った会場で、誠実直実を絵に描いたような高齢の退職職人の男性に、展示ガイドを頼んだ。とつとつとした説明。日本産業が現在の繁栄に到達した背景に、市井の職人の使命感があったことを、改めて確認した。

感銘の余韻に浸り会場を出たとたん、わずかな段差につまずき、足首や膝を打った。だがK夫妻の機転で義兄のY産婦人科医師の自宅で応急処置をしてもらい、事なきを得た。
Y医師も一緒の夕食会で、私は日頃の産科医への疑問を尋ねる幸運に恵まれた。

政府は少子化対策の大号令を掛けるが、肝心の産科医不足についてどうなっているのか?

Y医師は「産科医数が圧倒的に少ない理由は、他の分野に比べ医療訴訟が多く、損害賠償額が過重であること。例えば出産自体は無事終了しても、1〜2年経過後でないと乳児異常は発見されない」と説明してくれた。だが「長年の懸案であった(分娩事故で医療上の過失が明らかでない場合に補償金を支払う)『無過失補償制度』がようやく成立しようなので、期待が大きい。他方、産婦人科医一人で24時間対応は限界。グループ往診で切り抜きたい」ともいう。地域に産科医がいるのが当たり前、海外旅行は一度だけの73歳医師。持病の心臓病もあり引退したいが、辞められそうにない。

次世代育成のためにも、産科医師供給を「市場」に任せておくことはもはや限界だ。産科医は、ワークライフバランスの前提である。もはや、かつての物作りと同じように職人気質に依存する時代ではない。市民には地域で起きている現状を、絶えず学習する姿勢が求められている。

CONTENTS

- 解説 サブプライム問題、米・世界経済への影響は限定的(白石誠司) 日銀利上げを後押しするデカップリング論… 2
- BANCO 米中関係と日本(成相 修) …… 3
- 照一隅 景気の質を問う(泰久) …… 5
- インサイド 「不倒神話」倒壊の後(熊八) …… 8
- マーケットレーダー 加速する「ドルキャリア取引」(牧野義司) … 9
- 国際経済 人民元のアジア戦略 —中国学界の議論と政策の行方(石田 護) 地域の安定と繁栄へ日中通貨協力を… …… 10
- あと・らんだむ (神崎倫一) …… 13
- 財務に聞け 成長路線持続へ、金庫株でM&Aも —キャノン・大沢正宏常務… …… 14
- 連載小説⑫ 炎の森 (砂原和雄) …… 16
- 北風・南風 池田銀行(大阪) …… 20